

新 編 文学用語辞典

A Handbook of Literary Terms

福田陸太郎 共著
村松定孝

こびあん書房

東 京

新編 文学用語辞典

A Handbook of Literary Terms

福田陸太郎
村松定孝^著

東京
こびあん書房

編者略歴

福田陸太郎

1916年生 東京文理科大学卒 ソルボン
ヌに学ぶ インディアナ大学客員教授
専攻・英米文学・比較文学
東京教育大学名誉教授
著書・『アメリカ現代詩序説』『遠い国近
い人——欧米作家の横顔』『比較文学の諸
相』『東西相觸れるとき』など

村松定孝

1918年生 早稲田大学卒 同大学院修了
専攻・日本近代文学
現職・上智大学文学部教授
著書・『近代日本文学の系譜』『泉鏡花』
『作家の家系と環境』『文章表現法』など

1590-0060-2444

© 1987

昭和62年6月30日 初版発行

昭和63年6月30日 再版発行

編者	ふく だ りく た ろう 福 田 陸 太 郎
	むら まつ さだ たか 村 松 定 孝
発行者	木 村 欽 一
印刷所	誠 友 印 刷

発行所 株式会社 こびあん書房

東京都文京区小日向 3-11-13

電話03(941)4683 振替東京3-191812

ISBN4-87558-355-9 C1590 ¥2000E

は し が き

この小辞典は西洋文学・日本文学に関する論文・評論・参考書などに出てくる重要な文学用語を採集し、その用語の成立を明らかにしたうえで、適切な解説をほどこしたものである。その点、本辞典の編まれた目的は、あくまで初学の人々のために役立てるところにあるが、文学用語の理解は、他の学問用語にくらべて一般化しているだけに、かえって正確な意味の把握がおろそかになりがちであり、あやまった解釈がそのまま文学的評論のなかなどで、はばをきかしたりしているのをしばしば見かける。もちろん、本来の語義が転用され、あらたな意味のほうが大勢を支配しているような場合もあるから、いちがいに原義のみにたよるわけにもいかないが、文学研究者はいちおう文学用語の歴史的考察をふまえて、論文の性格に応じて、それがどのように用いられているかを吟味するだけの能力をそなえる必要がある。本辞典の編者はここに着目し、できるだけわかりやすくかつ妥当な認識に立って、解説をこころみることにした。

文学用語は大別して、文学研究上の術語・文芸思潮や流派の名称・現代の文芸評論などを読むときに会える文学的流行語の三つに分類される。術語には「ロマン主義」「自然主義」のように既に抽象化されているものと、「荒事」「純粹小説」のように、歌舞伎や日本の近代文学史のなかで初めてあつかわれたり、特定の作家によって主張された固有名詞にちかいものがあるが、この区別は、それが用いられる範囲のいかんによって抽象的になったり、歴史的意味しか与えられなかったりすることもある。辞典の編者の苦心を要するところだが、類似の各項目との関連を考慮しつつ、読者の世界文学

ないしは日本文学の知識の全域にわたる教養の涵養に資するようにつとめたつもりである。文芸思潮や流派名については、海外と国内のそれとの影響関係・比較文学的考察に意を用いた。文学的流行語は、つねに流動しているので、そのすべてを網羅することは不可能であるが、なるべく頻度数の多いものをにがさぬようにし、それが文学用語として定着したもの、たとえば「逃亡奴隷」「第三の新人」のような語については文学術語なみにあつかった。しかし、学術的用語を目あてにする読者には異論のある言葉まで本書中には含まれているかもしれない。よろしく読者の御判断を乞いたい。

先にも述べたごとく、本書は初学者の勉強の手びき書となるのを目的としたから、高度な研究分野にたずさわる方々から見れば、解説の叙述に書入れを加えたくなるにちがいない。読者は本辞典を足場にして、次第にそれぞれの学問的研究へすすむことをおすすめする。要するに本辞典は、便利ですぐさま役立つのがねらいである。学生諸君が本辞典を活用し、文学用語を正しく理解し、論文・評論の読解に役立てたうえで、各自のレポートや論文作成の際のハンドブックとしてくださることを希望する。なお、本書は約十年前に編集を行ない、既に他社より出版をみた。今回は装を改め、更に最近の文学用語を取り入れたが、その項目の選定・解説等については早稲田大学教授森常治氏の多大な御尽力を得たことを感謝する。また、本書の出版に当って、こびあん書房社主木村欽一氏の御厚意にあずかったことに対し、ここに深甚の謝意を表するものである。

1987年1月

福田陸太郎
村松定孝

凡 例

1 外国語からきた用語については原綴を示した。日本語の見出し語についても、それに相当するものとしてよく用いられる外国語がある場合、それを並記した。

2 外国語の種類については次の略語表示を用いた。

[E.] = 英 語 [A.] = 米 語 [F.] = フランス語
[G.] = ドイツ語 [I.] = イタリア語 [L.] = ラテン語
[R.] = ロシア語 [S.] = スペイン語

3 解説文中の * 印は独立項目として扱われているものを示す。

4 解説末尾の → 印は、参照すべき別項目を示す。

5 外国の固有名詞の表記などはふつう行なわれている書き方を用い、作者の生没年や作品の出版年代などは、必要な場合だけ記入し、しいて、統一をはからなかった。

新編 文学用語辞典

ア

間狂言 あいぎょ 狂言は能と能との間にはさまり、幕間に演ぜられる笑いを主眼とした寸劇であるが、独立した本狂言の他に、能の前半と後半のあいだに狂言師が登場して能の配役を分担することがある。それを間狂言という。すなわち、能はシテ、ワキ、ツレ、子方などが、それぞれ、その役柄によって一応能を構成するが、間狂言の俳優は里人とか都人などに扮し、劇の進行をおかし味のある語りによって補助し、内容を説明する一役を買う。→狂言

アイディアリズム idealism [E.] 理想主義。観念論。一般に、物事を現実的ではなく、理想化して考える傾向を言う。哲学においてプラトンを祖とする唯心論を指し、ロマン主義時代のヨーロッパに発達した。代表的な哲学者としてイギリスのロック、バークレー、ヒューム、ドイツのカント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルらがあげられる。リアリズムに対立する態度であり、日本では白樺派の文学がこの派の文学の好例となる。

アイロニー irony [E.] 皮肉。反語。言葉の表面の意味にかくれて、それと逆のことを対照的にほのめかす表現形式。広義では現実と外観が一致しないことにも用いる。シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』におけるアントニーのシーザー追悼の演説などに見られるし、『ガリバー旅行記』の作者スウィフトなどもアイロニーの名手とされている。ソクラテスは議論の際に、自分が無知で、相手の視点に同調するようにみせて、けっきょく相手を愚弄し、その弱点を暴露したが、そういうのをソクラテスのアイロニーと呼ぶ。また、アメリカの「ニュークリスティシズム」では、詩の中にアイロニーを発見し、それを説明することを重要な仕事とした。→ドラマティック・ア

アイン-アウト

イロニー

アインフュールング Einfühlung [G.] 感情移入。対象に自分の感情を移し、また対象が感じているであろうことをみずから感じ取ること、たとえば「木々は喜びにみちている」のように非情の自然物の中に感情があるように表現する。それは一種の擬人化を伴うことが多いが、感情移入のできることは、文学者にとって最も重要な資質の一つであると考えられる。

アヴァン・ギャルド avant-garde [F.] 前衛。元来は軍隊用語であるが、転じて、先端をゆく実験的な芸術運動についても用いられるようになった。たとえば、かつてのダダイスム、シュルレアリスムをはじめとして、前衛映画や近ごろの前衛書道に至るまで数多い。この運動の根底となっているのは、哲学や心理学であり、特にフロイトの精神分析による人間の深層意識の探索、マルクス主義による社会変革の欲求を原動力として、既成の価値の否定と破壊の気運に乗じたものであり、20世紀芸術に新生面を開ききっかけを作った。

アヴァン・ゲール avant-guerre [F.] 戦前。特にフランスの第1次大戦前の文芸思潮を指したが、第2次大戦前のものに対しても用いられるようになり、アプレ・ゲール（戦後）派に対して、古風で保守的な考え方や風俗をも意味するようになった。日本ではふつう太平洋戦争以前の時代について用いられている。

アウトサイダー outsider [E.] 局外者。1つのグループの仲間と認められない人。イギリスのいわゆる「怒れる若者」の一人である評論家コリン・ウィルソンが1956年に同名の著書を出して以来、この言葉はよく用いられるようになった。彼はアウトサイダーとしてニーチェ、ゴッホ、ランボーたちや、ドストエフスキー、サルトル、カミュ、カフカの作中人物などをあげ、社会から疎外されているこれらの余計者の存在の中に、積極的な新しい秩序への肯定的精神を見出

そうとする。その意味では、すべての真の芸術家はアウトサイダーでなければならぬだろう。この発想に基づいて書かれたのが、河上徹太郎の『日本のアウトサイダー』（昭和34年）で、その中には中原中也、萩原朔太郎、岩野泡鳴、河上肇、岡倉天心、内村鑑三らの名前があげられている。

青本 あおほん 江戸時代の大衆読物。半紙二つ折の大きさと表紙の色が萌黄色であるところからこの名称で呼ばれる。文を主とした読物ほんに対し、各ページごとに絵があり、それに文字が書きそえてある小説本を草双紙くさふしといい、青本もその一種である。幼童向けの赤本あかほんに比べやや成人向きな内容を盛り、恋愛、怪異、戦記、歌舞伎などに取材している。延享元年（1744）から安永3年（1774）にかけて行なわれ、明和の末年（1771）が全盛期であった。

赤い鳥 あかいとり 児童文芸雑誌。大正7年（1918）7月、鈴木三重吉によって創刊され、昭和11年（1936）8月、三重吉の死をもって終刊。世間にはびこっている俗悪な児童読物を排除し、芸術として真価ある純麗な童話と童謡を与え子供の心情を高める目的から三重吉は当時の一流作家を動員、浪漫性ゆたかな児童文学運動が同誌によって展開され、小川未明・島崎藤村・小山内薫・有島武郎・芥川竜之介・豊島与志雄・宇野浩二・秋田雨雀・久保田万太郎・小島政二郎等が童話を、北原白秋・三木露風・野口雨情・西条八十のほか泉鏡花なども童謡を寄せている。なお、同誌は新人育成にも大いにつとめ、童話作家では坪田譲治、塚原健二郎、新美南吉、童謡作家では大木篤夫・与田準一・巽聖歌・藤田圭雄を輩出させた。また児童作文の創作指導にも力をそそぎ、『綴方教室』の豊田正子を生み、わが国の児童文学史・児童教育史の上に偉大な足跡を残した。戦後、『赤い鳥』に匹敵するような全文壇の協力する純粋な児童雑誌の刊行は目下のところ実現されていない。

アカホ - アクタ

赤本 あかほん 江戸時代の草双紙 くさふし の一種で年少者向けの絵を主とした小説本。元禄から50年間ほど栄えた。内容は動物を擬人化したものが多く、近世における児童文学史料とされているが、後期の赤本には諷刺性に富んだ成人向けのものも生じた。大きさは半紙判、半紙二つ折、豆本などさまざまで、表紙の色が赤いところからこの名称で呼ばれる。なお、明治以後、子供向けの小型読物本にこの名が用いられ、そうした出版をする本屋を赤本屋と称した。転じて、内容紙質共に粗悪な書籍をこの名で呼び、戦後カストリ雑誌という言葉が用いられたのも、それと共通する。

芥川賞 あかぎやう 昭和10年(1935)に文芸春秋社長の菊地寛が友人芥川竜之介の名を記念し新進作家に文学賞をおくことを発意して設定。昭和13年に日本文学振興会を設立、文芸春秋から切り離して恒久的機関としたが、年2回の受賞作は文芸春秋に再掲載される。第1回は石川達三の『蒼氓』が受賞、戦争で一時中絶したが戦後に復活した。これまでに受賞した作家で現在でも活躍をつづけている作家には、石川淳・八木義徳、芝木好子・井上靖・安部公房・堀田善衛・松本清張・安岡章太郎・吉行淳之介・小島信夫・庄野潤三、遠藤周作・石原慎太郎・菊村到・開高健・大江健三郎・北杜夫・三浦哲郎・河野多恵子・田辺聖子・柴田翔・津村節子・高井有一・丸谷才一・大庭みな子・庄司薫・田久保英夫・古井由吉・日野啓三・清岡卓行・中上健次らがある。なお同賞の選考委員は当初は芥川や文芸春秋に関係の深い久米正雄・佐藤春夫・宇野浩二・横光利一・川端康成・滝井孝作だったが、上記の他に井伏鱒二・丹羽文雄・舟橋聖一・井上靖・永井竜男・石川淳・中村光夫・安岡章太郎・吉行淳之介が加わった。ここ十年間の本賞の受賞者の70%は女性によって占められている。現在の選考委員は開高・田久保・古井・三浦・水上勉・吉行・日野・黒井千次のほか河野・大庭の二人の女流作家が初めて登場、文壇女性時代を反

映するに至った観がある。

アクチュアリティ actuality [E.] 事実性 ないしは実質性の意で、これが文学用語として、しきりに用いられるようになったのは、平野謙が昭和36年に純文学変質説を称えたときに使用して以来である。平野は現代文学の衰微を救うにはアクチュアリティの回復という方向に道を求めるべきだと説いた。→純文学変質説

悪魔主義 じあくま主義 diabolism [E.], diabolisme [F.] 19世紀末に目立った頹廢的な耽美主義の傾向で、倫理や習俗に反抗し、悪魔的なものに美と快感を求める態度。ポー、ボードレール、ワイルドらが代表的作家。

アクロスティック acrostic [E.] 各行のはじめとか真中とかおわりの文字を順につづるとある語句・文章になるように構成された一種の遊戯表現。たとえば「カバル」 cabal [E.] という語は「小人数の陰謀団」を意味するが、それはイギリスのチャールズ2世時代の外務委員会を構成していた5人の人物（クリフォード Clifford, アーリントン Arlington バッキンガム Buckingham, アシュレー Ashley ロンダーデイル Lauderdale）の頭文字にひっかけたしゃれとも関係がある。現代の「ナトー」（Nato = North Atlantic Treaty Organization 北大西洋条約機構）や「プルートー」（Pluto = Pipe line under the ocean イギリスの海峡の下を通っている英仏間の送油管）もアクロスティックの一種である。

アーケイズム archaism [E.] 擬古体、古文体、時代おくれの古めかしいものについて用いられ、特に文学批評においては、古語、廃語、古風な文章を指す。表現にある種の重みとか威厳とか素朴さとかを添えるために、これを用いて効果を出すこともできるが、不適当な場合に使われると人工的で不自然でこっけいな感じを与える。チャールズ・ラムの『エリア随筆集』などこの文体が効果的に使用された

アズマ-アソビ

例である。アララギ派の歌にみられる万葉調もアーケイズムと考えるとよい。フランス語流に発音して「アルカイズム」archaïsme と言うこともある。形容詞は「アーケイク」archaic [E.], 「アルカイク」archaïque [F.]。

東歌 あづま 奈良，京都を中心にして東国地方のひなびた素朴な歌いぶりを和歌という。『万葉集』巻14，『古今和歌集』巻20に載せられており作者は不詳。民謡のごときものだったものが多く，九州守護のため東国から召集された防人 へいじん の歌も東歌の同類と考えられよう。庶民の生活体験からにじみ出た恋愛の哀歓，夫婦・親子の愛に発する別離の悲しみなどが卒直にうたわれている。〔例〕「稲つけばかがる吾手を今宵もか殿のわく子とりてなげかむ」。

アソシエーション association [E.] 連想。事物や観念を互いに結びつける心の働き。譬喩（シミリーやメタファーを含む）はこの連想によって作り出される。シンボルやイメージが生まれるのにも，連想が一役買うことが多い。結びつけられる2つのものの関係が近い場合と遠い場合によって効果も異なるが，連想は詩文学における一つの重要な要素と考えられる。

あそび 文学用語としての「あそび」は単なる遊戯的娯楽文学を指すものではない。森鷗外が『あそび』（明治43）という小説の中で，当時の自然主義の窒息するような固苦しさを批判し，官吏であり，文学者である主人公が役所での仕事を「遊び」のつもりでやっており，創作するときも，子供が好きな遊びに打興ずるような心でやっていると自己批判しているところがあるが，これはまさしく鷗外の文学態度だったといえよう。つまり，人間のやることを冷たく澄みきった理性の目で眺め，それを余裕をもって突きはなして見るところに「遊び」が生ずる。一種の傍観者態度ともいえるが，決して作品に向かって投げやりな不真面目な態度をとるわけではない。彼は文学上の

ディレッタントテストであるというより人生そのものに対してディレッタントの態度を好み、(諦観) resignation の境地に生きたのである。この態度は、『草枕』を書いた当時の 漱石の気分やや通うものがあるが、他にあまり例をみない。

新しき村 あたらしきむら 大正7年に武者小路実篤が宮崎県児湯郡木城村に建設した部落で、彼の理想に共鳴した同士たちがその地で農業を営みながら余暇を創造的な仕事(文学、美術など)に当てる方針がとられた。しかし、その後、県営の水力発電所を作るため、村の一部が水中に没することになり現在はほとんど解散状態になっている。これに対し第2の新しき村が昭和14年に埼玉県入間郡毛呂山町の丘陵地に創建され現代に至っている。宮崎県の方の新しき村を「西の村」と呼び、埼玉のを「東の村」と称する。「新しき村」については「白樺派」の内部にも、一種のユートピアを夢みた非現実的企てに過ぎないという批判があったり、外部からの冷嘲を受けたりもしたが、武者小路の信念はかたく、ともかくその素志が貫かれている事実についての社会的功績は大きい。たとえ「新しき村」に行って住まわなくても、そういう存在を是認する心情が文化人の間に少しでもたもたれること、社会への無言の警告として意義のあることは、否定できない。

悪漢小説 あくかんしようせつ picaresque novel [E.], roman picaresque [F.] 悪漢(スペイン語で「ピカロ」)を主人公とした小説。16世紀スペインでできた小説形式。その主人公は有徳の騎士といった型でなく、いわば無頼の人であるが、(悪)知恵にたけ、ある種の魅力を持ち、彼が行く先々でする冒険を第一人称で語る形式をとるのが通例である。そういうエピソードの積み重なりが小説を形成していて、しっかりした構成をもたない。そしてふつう下層階級の人々を描き、その筆致は写実的かつ諷刺的である。登場人物の性格そのものの発展はなく、それよりも外面的な状況の変化によって話をおもしろくする。有

アーテ - アナク

名な作品としては、ルサージュの『ジル・プラス』(1715)、トマス・ナッシュの『不運な旅人』(1594)などが先駆的なものであり、主人公が女性であるデフォアの『モル・フランダーズ』(1722)や、フィールディングの『トム・ジョウンズ』(1749)なども悪漢小説の要素をもつ。長い間に消長はあるが、この系列の作品は絶えることがなく、マーク・トウェインの『ハックルベリ・フィンの冒険』(1884)などを経て、現代ではソール・ペローの『オーギー・マーチの冒険』(1953)などの作品を生んでいる。日本の立川文庫の講談本や、サムライが諸国を武者修行して歩く型の大衆小説の多くも、このジャンルに属するとみなしてよいだろう。純文学の方でも近ごろは悪漢小説ふうのものがかなり現われている。→ネオ・ピカレスク・ノヴェル

アーティザン artisan [E.] 職人(的芸術家)。技巧の面で熟練した人。昔はこの言葉は芸術家(アーティスト artist)と同義に使われたが、現在はむしろ手先の器用さを誇る職人の要素が強調されている。だから時には真の芸術家とくらべてやや劣るものを意味することがある。

アート・フォア・アート art for art [E.] →芸術至上主義

アート・フォア・ライフ art for life [E.] →人生のための
芸術

アド・リブ ad-lib [L.] 即席でしゃべる。元来、演劇用語で脚本に書かれていないせりふを入れてしゃべること。動詞にも名詞にも形容詞にも使う。ラテン語のアド・リビトゥム ad libitum「随意に」「いくらでも」の略。

アナクロニズム anachronism [E.] 時代錯誤。事物や人物や思想が、実際に存在した時代とちがう時代に現われることを言う。だから時代おくれのものをけなすときにこの言葉を使うことがあるが、文学批評においては、作品中に出てくる事がらが実はその作品に描かれ

ている時代以後に出現したものである場合に、それをアナクロニズムと称する。たとえばシェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』の劇の中に時計のことが出るが、時計はシーザー時代から約1400年後の発明である。また作品にユーモアを添えるためにわざとアナクロニズムを用いることもある。マーク・トウェインがヨーロッパの封建制を諷刺した作品『アーサー王宮廷のヤンキー』などはその一例である。

アニミズム animism [E.] 万有靈魂説。あらゆる自然物に魂があるとする説。「魂」を意味するラテン語 *anima* から来た語。原始人や古代人にとって自然な考え方であり、ギリシア神話や日本神道などにもこういう思想が含まれている。木石や雷や地震にも何らかの意識があり、肉体をはなれた魂は更に生きつづけて、善事や悪事を働くというふうに考えたりする。

アヌス・ミラビリス Annus Mirabilis [L.] 驚異の年。英語で The Year of Wonders の意味。特に英国史での1666年を指す。この年はロンドンの大火があり、またイギリスがオランダの艦隊を打ち破って大勝利を得たあとの年である。ジョン・ドライデンはそれらの事件を同名の詩に歌った。以後この語は歴史上記念すべき年を意味し、また文学者にとっても最も顕著な業績を発表した年を言うようになった。たとえば1776年は米国史におけるアヌス・ミラビリス（独立宣言の年）であり、1819年はジョン・キーツのアヌス・ミラビリス（不朽の傑作であるいくつかのオードが発表された年）である。

アノニミティ anonymity [E.] 匿名。作者不明の（アノニマス anonymous）状態。古い詩歌などには〈読み人知らず〉のものがあるし、民間伝承の物語など作者のわからぬものが多い。けれど匿名批評におけるように、わざと筆者の名前をかくすことによって、遠慮会釈なく相手の弱点をついたり、なまなましい現実の問題にメスを加